

<横浜ラポール田川氏の講演を聞いて>

1 横浜ラポール開業時の理念

「ラポールができたときの考え方（思想）はどういうことかという『なんで？分ける必要はないじゃん？』、障害者と健常者って分ける必要はなくて、『一緒に楽しめれば、それが一番じゃないの？』ということ。

⇒障害者の立場から一言申し上げれば、「なんでオリンピックとパラリンピックを分ける必要があるのか」と思っています。

2 障害をもっていようが、ごくごく普通に接すればいい

「地域の人たちや施設の方々も『うちの施設では障害者のスポーツは難しいかもしれませんが、心配です』というようなリアクションが多かったのですが、少しずつ受け入れてくださるところが増えていきました。これがいわゆる『ノーマライゼーション』。障害のある方も、普通に暮らせる社会、ということですね。そして、これは障害者福祉の一大目標です。スポーツは、社会のノーマライゼーションを進めるツールとして、大変有効だと思います。

⇒恐れずにまずはやってみる、いや、その前に普通に障害者と日常を共にする。そんなことが必要なのではないのでしょうか。だから、僕は地域活動の世界に思い切って飛び込みました。

3 そもそも障害者って特別な存在でもなんでもない

「障害者ってなんだろう？と言う時、そんなに特別なものではないですよ」・・・「福祉サイドから障害者スポーツへ入ってくる人の特徴として、何でもかんでも手厚くサポートしすぎるとい面があります。自分でできることは、できるだけ本人にやらしてもらおう。また、少し難しそうなことでもチャレンジしてもらおう、ということが大切です。・・・ポイントは、達成できそうな目標に対して、チャレンジする、ということだと思います。サポートする側が、手取り足取り、何でも手伝ってあげる対応は、このようなモチベーションを阻害します。」

⇒少なくとも、障害者本人は、毎日の生活では自身が障害者であることは意識しません。というより、あえて意識しないようにしています。そして、できないことは、それに代わる手段はないかと常に考えています。

4 体育や音楽でできなかったときのフォローが大切

学校テストの中で、体育や音楽は少し特殊です。例えば、跳び箱のテストでは、友達の前で上手く跳べずに恥をかきます。上手く跳べればいいのですが、跳び箱に衝突したり、手前で止まったりすると笑われたり、馬鹿にされたりします。

音楽のテストでは、みんなの前で音痴やリズム感の無さが明白になったりします。英語や数学であれば、先生と自分にしかわからないのですが、体育や音楽ではそうはいきません。特に障害のある人たちは、このような経験を重ねてくるのが容易に想像できます。

このような経験をした人をそのままにしておけば、一生スポーツを楽しもうという気にはならないと思います。私たちは、このような場面が生じた場合、できるだけ速やかにダメージを受けた人をサポートする必要があります。

⇒講義に出席していて、大勢の前で指名されました。もちろん、何を聞かれているのか、何を答えていいのかもわかりませんでした。たくさんの様々な視線を浴びてただ立ちすくすしかありませんでした。

5 ボッチャはパラスポーツではなく一般のスポーツ

ボッチャはたまたまパラリンピックの種目なので『パラスポーツ（障害者スポーツ）』と位置付けられているけれども、本来はペタンクと同様、誰もが楽しめる一般のスポーツです。

⇒そもそもが、パラスポーツだと分ける必要がありません。

【横浜ラポール 田川氏の講演録】

資料を確認します。一つが短冊状のリーフレットで、ラポールの施設の利用案内。ラポールにはこんな施設がありますよ、ということが書いてあります。もう一つはラポールが月に一回発行している広報誌のラポラポ6月号。そして最後が、A4カラープリント。私の話は、このプリントを使って行います。

今日の研修は二部構成。一つは皆さんにラポールってこんなところですよ、こんなことをやってるんですよ、ということをお伝えするお話。

そして、もう一つは、「ストリートボッチャ」の実技体験です。この体験を通して、皆さんの地区で「ボッチャ」を取り入れていただき、そこに障害のある方が一人でも参加する場面が生まれれば、それが私たちの仕事の一つのゴールなので、ありがたいなという話になります。

はじめは私のお話から。実は、(横浜)港北区に、ラポールという施設がありながら、意外と知らない、行ったことがない、という方が結構いらっしゃる事が判り、これまでアピールが下手だったっていうか、まずかったなあと思っています。

さて、それでは、資料に沿ってお話します。はじめは、ラポールの概要。「1. 概要メモ」を見てください。平成4年8月オープン(開所)で、今年で30周年になりました。

ラポールの趣旨は、平成4年のオープン時から今でも変わらず、横浜市における障害者スポーツの中核拠点という位置づけです。そのため、ラポールに来てもらってスポーツ活動を楽しんでもらう、という側面と、ラポールから地域に出かけて行って、地域のいろんな場所で障害者スポーツを普及するというのも、大きな役割です。

コロナ以前は、一日平均で延べ1300人程度の利用者が来館されていました。この数字は国内類似施設の中で、トップクラスの利用者数です。もちろん、横浜の人口が多い、という前提はありますが、その他にも、新横浜駅から近い、駅からの送迎バスが30分ごとに運行、大型の駐車場等が、他都市に比べて有利な点、と言えそうです。

横浜ラポールが30年前にできた時は、すでに20数か所、類似の障害者スポーツセンターがありましたが、それらは障害の方の利用だけに制限されていて、健常者は使えません。また、利用料金はすべて無料です。

一方、ラポールは一般健常者も使えるし、受益者負担の考えから、一定の料金は取りましよう、という形で始まっています。ラポールは30年前のスタート時から、障害者、健常者が一緒に利用することができる施設だったわけです。

で、ラポールができたときの考え方(思想)はどういうことかということ「なんで?分ける必要ないじゃん?」、障害者と健常者って分ける必要はなくて、「一緒に楽しめれば、それが一番じゃないの?」っていうことです。

利用料金については、全て無料となると、地域で活動する時に中々地元でやるってなりにくいじゃないのっていう点と、自分が楽しむためには、やはり一定のコストがかかるんだ、という受益者負担の考えですね。

ところで、今、健常者の方でも使えますよ、と言ったのですが、実はコロナ禍になってからは、利用者数制限の必要性もあって、現在は障害のある方とその介護者だけの利用となっています。残念ではありますが、当面はこの形が続くだろう、と思います。

話は変わりますが、去年の1月に「ラポール上大岡」という施設が新たに開館しました。上大岡駅に直結したビルの中にあります。ステーションビル内にあるので、当然、新横浜とは施設の性格が異なります。駐車場は少ないし、温水プール、グラウンドもありません。

そのため、新横浜とは役割分担をし、それぞれの特徴を活かした運営をしています。一言で言うと、「ラポール上大岡」は横浜市の南部方面で、障害者スポーツを楽しんでもらうための拠点です。

新横浜、上大岡のどちらも同じですが、まず、各施設の利用者に対して、安全安心、快適な施設利用をしてもらう、という役割があります。そのような事業の中で、多くの経験とそれに基づいたノウハウが蓄積されていきます。

例えば、あるに対し障害、Aというやり方をすると結構上手くいくとか、逆にBというやり方では危険が伴うな、など。こういったノウハウを持って、地域のスポーツセンター等で展開することが、私たちのもう一つの事業で、まさに拠点機能の発揮部分です。

この業務は、地域支援事業という形で平成12年に正式事業化しています。

この事業では、各区スポーツセンター・地区センター・ケアプラザ・区役所等の施設を利用していただきながら、地域の方々と協力して展開してきました。一番のピーク時では、年間約280回、ラポールのスタッフが地域に出かけて、スポーツ教室などを実施しました。

この事業を初めた当初は、地域の人たちや施設の方々も「うちの施設では障害者のスポーツは難しいかもしれません、心配です」というようなリアクションが多かったのですが、少しずつ受け入れてくださるところが増えていきました。これがいわゆる「ノーマライゼーション」。

障害のある方も、普通に暮らせる社会、ということですね。そして、これは障害者福祉の一大目標です。スポーツは、社会のノーマライゼーションを進めるツールとして、大変有効だと思います。

次に、地域でどんなことをやってきたかと言うと、卓球、グランドゴルフやボッチャなど。

私は、これまでスポーツ推進委員さん向けの研修を何度か経験しています。そして、地域支援事業をご説明すると、推進委員の皆さんも「是非一緒にやりたいですねって！」というふうな話になるんですが、多くの場合、最終的には「やっぱり障害の人たちへの対応が心配で、なかなか踏み込めないですね」ってなりました。

それは、気持ちとしてはよくわかりますが、私が皆さんにお伝えしたいのは「障害者ってなんだろう？と言う時、そんなに特別なものではないですよ」と思ってほしいなあ、ということです。

例えば目が悪くなってきたら、見えなくなりますよね。これって視覚障害ですが、眼鏡をつければ見えますよね。耳が聞こえなくなったら聴覚障害ですが、補聴器で聞こえるようにすればいいじゃん、ってことです。

私は現役時代に、色々な場所の骨折などをしましたが、普通に歩けないから学校にいけない、では無くて、松葉杖を使えばいい訳です。足が麻痺して車椅子乗っている人と変わらないんですよ。

障害ってというのは、このように自分たちが不便を感じるような目が悪い、耳が聞こえない、ということのちょっと先って考えてもらっていいんじゃないかな、というふうに思います。

ここからは、ボッチャについてです。ボッチャは「BOCCIA」と書き、イタリア語で球（ボール）のことです。南ヨーロッパ、フランスとスペインの国境、ピレネー山脈の辺りで行われていた遊びから派生したスポーツです。同じ仲間が一番有名なのが、ペタンク。ペタンクがイタリアの方に伝わってボッチャになり、イギリスに伝わったのがローンボウルズと考えられています。

現在、ボッチャは重度障害者向けのパラリンピック正式種目という位置づけなので、多くの方は、そのイメージを持っていると思います。そして、重度障害者向けということで、様々な方が楽しめるので、地域でも取り入れやすい種目となっています。

地域で取り入れるという点から考えると、パラリンピック種目としてのボッチャをそのまま行う必要はないです。多くの人に地域で楽しんでもらうためには、パラリンピックと同じ公式ルール、コートや用具にとられると、かえってマイナスになることが多い、と思います。

パラリンピック選手を養成するのであれば別ですけど、皆さんが地域の方々と一緒に楽しもうよ、という時には、そんな必要はありません。競技を熱心にやっていた人ほど、公式のルールや用具を順守しなきゃいけない、と思っちゃう。

例えば、ボッチャのボールが無ければ、空気の甘い軟式テニスボールを古新聞で巻けば、何とか代用できます。私たちや皆さんが、ボッチャを普及させて楽しんでもらうことを考える際、まずは、ただ楽しかったと思ってもらえばいいのです。多くの障害者の皆さんは、競技選手になるつもりはないですから。

一方で、福祉サイドから障害者スポーツへ入ってくる人の特徴として、何でもかんでも手厚

くサポートしすぎるといふ面があります。自分でできることは、できるだけ本人にやってもらふ。また、少し難しそうなことでもチャレンジしてもらふ、ということが大切です。

学校のテストを考えてみましょう。何も勉強しなくても、満点が取れるようなテストでは、努力しませんよね。逆に、どんなに努力しても達成できないような問題であれば、やはり頑張って勉強しようというモチベーションは生まれません。ポイントは、達成できそうな目標に対して、チャレンジする、ということだと思います。サポートする側が、手取り足取り、何でも手伝ってあげる対応は、このようなモチベーションを阻害します。

話は少し変わりますが、学校テストの中で、体育や音楽は少し特殊です。例えば、跳び箱のテストでは、友達の前で上手く跳べずに恥をかきます。上手く跳べればいいのですが、跳び箱に衝突したり、手前で止まったりすると笑われたり、馬鹿にされたりします。音楽のテストでは、みんなの前で音痴やリズム感の無さが明白になったりするでしょう。これが、英語や数学であれば、先生と自分にしかわからないのですが、体育や音楽ではそうはいきません。特に障害のある人たちは、このような経験を重ねてくるのが容易に想像できます。

このような経験をした人をそのままにしておけば、一生スポーツを楽しもうという気にはならないと思います。私たちは、このような場面が生じた場合、できるだけ速やかにダメージを受けた人をサポートする必要があります。

ということで、稚拙なお話に終始しましたが私の話はこれで終わりです。

どうもありがとうございました。